

第12回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

オード《アレグザンダーの饗宴》全曲公演

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《アレグザンダーの饗宴》
音の温かみに浸った一夜。ドライデンの英詩にヘンデルが作曲したオード《アレグザンダーの饗宴》(1736)が全曲演奏され、奏者側も聴衆も共に高い集中力を発揮した。まずは三澤寿喜の指揮とキャノンズ・コンサート室内合唱団&管弦楽団を賞賛。スムーズな棒のもと滑らかな合奏と瞬発力に富むコーラスを堪能。中でもヴァイオリンの柔らかな音色と金管の緻密さ、チェロの雄弁なソロ(懸田貴嗣)と男声パートの厚みに感じ入った。続いてはソリスト勢に賛辞を。広瀬奈緒(S)の可憐で伸びやかな高音域、辻裕久(T)の枯淡のフレージングと丁寧なコロラトゥーラ、牧野正人(Bs)の逞しい中音域に拍手を送りたい。なお、今回のステージでは、初演時に追加された4曲から「ハーブ協奏曲」と「オルガン協奏曲」の2曲を挿入し併演。伊藤美恵(Hp)の極めて繊細な音色、勝山雅世(Vc)の流麗な指捌きに心奪われた。(2月13日・浜離宮朝日ホール) (岸純信)